

The Eastern Buddhist Society 公開セミナー

第 10 回 鈴木大拙訳『教行信証』信巻を読もう！

講師：安富信哉

(大谷大学教授・EBS 事務局長)

先回の続きのところを学びたいと思います。先回は、大信積の如来の加威力・大悲広慧の力というところを話しました。

他力（因）

如来の加威力 — 縁力

大悲広慧の力 — 因力

信心の獲得（果） = 成就

こここのところで力ということが出てきました。私達の信心の獲得^{ぎふくよく}に大きな力がこもっている。信心の獲得の背景に様々な力があって私達が信心を得るのだ、これは他力ということになります。さらに親鸞聖人は分析をして意味を分けてそのように言っておられます。the authoritative power of Nyorai is to get hold of them, the universally benefiting and enlightening power of Nyorai is to work in them.¹というところですね。全体的に信心の獲得には力が働いていて私達は信心を得るということが説かれています。信心というものの背景には大きな因力と縁力が働いている。そして因力と縁力が働き、信心の獲得（果）がある。これが成就ということ。これは他力が因になる。他力が因となって信心が果となる。我々の信心の獲得というのは本願の成就ですね。そういう因縁ということが非常に重要です。

大拙訳（DTS）

信巻 — Part1 (p.87) — 信の背景の力 — 受動 (Passive) — 内的側面

— Part2 (p.125) — 信による動き — 能動 (Active) — 外的側面

信の動態 (Dynamism of Faith)

そういうこと大拙訳でいうと Part1（「信巻」本巻）は 87 頁から、Part2（「信巻」末巻）は 125 頁からに書かれています。Part1 では信心獲得の因縁が述べられています。信心獲得したものがどのような心の核として展開して行くか、それが Part2 に書かれています。だから Part1 は信心の因縁、そして信仰的主体の活動、信の背景の力、そして Part2 は信による

¹ DTS. p.88, 110

動き。そして Part1 は受動 (Passive)、Part2 は能動 (Active) です。両方とも力が問題になってきますので、ここに信の動態 (Dynamism of Faith) が説かれています。いわばその信の動態の内的側面と外的側面が説かれているわけです。以上が先回まで話したところです。

「信巻」 眞実信の釈文

今日は引用文のところに入って行きます。大拙訳で 88 頁ですが、随分と続いています。どこまで続くかと言いますと、103 頁まで続いて行きます。引用というのは経典の引用と釈文の引用ということになります。そこのところを外形的なところでたずねてみたいと思います。

		『聖典』	DTS
A・経文証	因願文 (至心信楽本願の文)	P.212	P.88
	成就文	P.212	P.89
	獲信利益の文	P.212	P.89
B・釈文証	曇鸞	P.213	P.90
	善導	P.214	P.91
	源信	P.222	P.103

釈文が経文証と釈文証になります。経文証では因願文・成就文・獲信利益の文。そして釈文証では曇鸞・善導・源信です。経文証はスートラ (経典) によって証明していくということです。釈文証はコメントリー (註釈) です。因願文は勿論、第 18 願のことです。

至心信楽の本願の文、

『大経』に言わく、設い我仏を得たらんに、十方の衆生、心を至し信楽して我が国に生まれんと欲うて、乃至十念せん。もし生まれざれば正覚を取らじと。ただ五逆と誹謗正法とを除く、と。已上

本願成就の文、

『経』(大経)に言わく、諸有衆生、その名号を聞きて、信心歓喜せんこと、乃至一念せん。至心に回向せしめたまえり。かの国に生まれんと願ずれば、すなわち往生を得、不退転に住せん。ただ五逆と誹謗正法とをば除く、と。已上²

(獲得利益の文)

² 『聖典』 P.212, 14

(大經) また言わく、法を聞いてよく忘れず、見て敬い得て大きに慶よろこばば、すな
わち我が善しんぬき親友なり。このゆえに当こころに意おこを發すべし、と。已上³

DTS では

We read in The Larger Sutra 「vol. 1」 :

"If, upon my attaining Buddhahood, all beings in the ten quarters aspiring in all sincerity and faith to be born in my Country, meditating [i.e., pronouncing my Name; *nembutsu*] up to ten times, were not to be born there, then may I not attain the Supreme Enlightenment. Excepted from this are those who have committed the five grave offenses and those who slander the Right Dharma."⁴

とあります。成就文ですが、

Passage in 「vol. 2 of」 The 「Larger」 Sutra relating to the fulfillment of the Original Prayer reads :

As all beings hear his Name, faith is awakened in them and they are gladdened down to one thought. This comes to them from having been turned-over from Amida's sincere mind. When they desire to be born in the Pure Land, they are born there at that moment and abide in the stage of non-retrogression. Excepted from this are those who have committed the five grave offenses and those who slander the Right Dharma.⁵

とこうありまして、獲信利益の文が

「The Larger」 Sutra 「vol. 2」 says again :

Those of you who hear the Dharma, retain it in memory, envisage it and revere it, and find great joy in it—such are my [i.e., .Sakyamuni Buddha's] good friends. For this reason may you awaken your minds in the Dharma.⁶

となっています。以上のように因願文、成就文、獲信利益の文となっています。

それから釈文証が続いていきますが、それが『論註』から引用されます。それでそのところを一部分だけ拝読していきたいと思います。

聖典: 『論の註』に曰わく、「かの如来にょらいの名みなを称しょうし、かの如来にょらいの光明智相こうみょうちそうのごとく、
かの名義みょうぎのごとく、実のごとく修行し相応おむせんと欲おほうがゆえに」といえりと⁷。

DTS : In the Commentary on the Treatise 「vol. 2」, we read :

“It is the practice of pronouncing the Name of the Nyorai truly in accordance

³ 『聖典』 p.212, 1.16

⁴ DTS. p.88, 1.22

⁵ DTS. p.89, 1.1.

⁶ DTS. p.89, 1.24.

⁷ 『聖典』 p.213, 1.11.

with the Light of Nyorai's wisdom, the signification of his Name, and Reality as-it-is 「in order to be in harmony with the Original Prayer」.⁸

と続いています。さらに曇鸞の言葉として『讚阿弥陀仏偈』から引いています。

聖典:『讚阿弥陀仏偈』に曰わく、曇鸞和尚造なり あらゆるもの阿弥陀の徳号を聞きて、信心歡喜して聞くところを慶ばんこと、いまし一念におよぶまでせん⁹。

DTS : The Hymns to Amida Buddha (by Donran the Teacher) says:

All those who hear the meritorious Name of Amida Buddha believe in it, are joyful down to one thought about what they hear, become objects of merciful consideration on the part of one who is thoroughly sincere.¹⁰

となっています。そのあと善導の『観経義』(定善義)から引いています。

聖典:光明寺の『観経義』(定善義)に云わく、「如意」と言うは二種あり¹¹。

DTS : In The Exposition of the Sutra of Meditation by Komyoji 「Zendo」, we read:

The words “as willed” have two ways of being interpreted here.¹²

と言っています。非常に長いです。そして源信僧都の言葉が引かれています。

聖典:『往生要集』に云わく、『入法界品』に言わく、「たとえば人ありて不可壊の薬を得れば、一切の怨敵その便りを得ざるがごとし。菩薩摩訶薩もまたかくのごとし¹³。

DTS : In 「vol.1 of Genshin's」 Ojyoyoshu, [We read]:

According to The Avatamsaka Sutra, there is a man who has in his possession a drug which repels the approach of all enemies.¹⁴

と続いていきます。こういうように信巻に真実の信について経文証と釈文証がずっと引いている。これは親鸞聖人の一つの特徴です。

文類形式

『教行信証』という書物は全体が文類です。『顕浄土真実教行証文類』が『教行信証』の正式なタイトルです。ここに文類というのが出てきます。文類というのは assembly というような意味になります。大拙先生は the Collection of Passages と collection を使っておられま

⁸ DTS. p.90, 1.23.

⁹ 『聖典』 p.214, 1.7.

¹⁰ DTS. p.91, 1.23.

¹¹ 『聖典』 p.214, 1.10.

¹² DTS. p.91, 1.33

¹³ 『聖典』 p.222, 1.10.

¹⁴ DTS. p.103, 1.9.

す。『教行信証』は様々な文書が集められて、しかも時代的な順序を正しく、お経とそれを解釈した人々の言葉がずっと引用されています。それも時代にそって引きます。曇鸞は北魏で、善導は隋末から唐、源信は日本の平安時代です。これを時系列で引いています。クロノロジカルに引いているというのが親鸞の特徴です。文類というのは仏教の書物の書き方の新しい形式です。

法然上人であれば『^{せんじゃくしゅう}選 択 集』(『^{せんじゃくほんがねんぶつしゅう}選 択 本 願 念 仏 集』) さらに遡って源信は『往生要集』です。みな「集」です。これは書物を書く一つのスタイルです。一方、親鸞聖人の場合は文類形式をとるわけです。文類形式というのは様々な文を類聚るいじゅうしているということです。諸文類聚しよもんるいじゅうと言います。諸文類聚の文類形式で、一番有名なのは、宋代の宗 暁しゅうぎょうという人が書いた『^{らくほうもんるい}楽 邦 文 類』です。そういう文類形式というのが中国の宋代に起こってきます。親鸞聖人はその文類形式を受けたわけです。そして『^{じょうどもんるいじゅうしやう}顕 浄 土 真 実 教 行 証 文 類』、『^{じょうどさんぎやうおうじょうもんるい}浄 土 文 類 聚 鈔¹⁵』、『^{じょうどさんぎやうおうじょうもんるい}浄 土 三 経 往 生 文 類¹⁶』というような文類形式の書物を書いています。『往生要集』にしても『選 択 集』にしても或は文類にしても諸文を集めてお経や先達の言葉を集めて書物を作っていくという形式は日本のみならず中国においても仏教の著述の形式です。ではなぜ「集」や「文類」の形式をとるのか。これは自分の述べるものが独断ではないということです。権威に依っているということを言っているわけです。それで「集」や「文類」の形式を使っているわけです。これは非常に重要です。親鸞聖人の『教行信証』はとても引用が多いです。80 パーセントは引用です。それはどうしてかと言えば独断ではないということを表すためです。親鸞聖人は述べる信心のことを述べるについてお経の言葉や注釈書の言葉から引用しています。

教相と教系

次は教相と教系ということでお話しします。『教行信証』では『大経』因願文、成就文、獲得利益文が引用されています。

信心の根底 第 18 願

『大経』如来会 因願文 (Prayer)

成就文 (現実、実現)

親鸞教学の特色 — 成就文の着眼 — 聞

法然教学の特色 — 因願文の着眼 — 念 — 称

我々の信心の根底にあるのは第 18 願です。先ず 18 願の願文を挙げ、『大経』の因願文、如

¹⁵ 『聖典』 p.402.

¹⁶ 『聖典』 p.468.

来会の因願文を挙げます。それから成就文も挙げます。我々は信心というけれども、信心の起こるもと、信心の起源は第 18 願です。これが親鸞聖人です。信心というもののおおもとを尋ねていけば本願まで行き着くということです。そのことを親鸞聖人は『大経』の因願文と如来会の因願文、さらに『大経』の成就文と如来会の成就文に尋ねます。

親鸞聖人の場合、非常に重要なのは、この成就文を非常に大切にすることということです。信心の成就ということが非常に重要です。信心には成就があるということは現実ということです。信心の因ということだけに注目するのではなく信心の成就というところに注目する。これが親鸞教学の特色です。成就文への着眼です。大拙訳では prayer ですが、祈りというものが実現するというのはどういうことか。祈りが祈りで終わるならそれは夢のようなものです。夢が実現するという点において現実性が出てくる。親鸞聖人は現実を非常に重視します。現実の実現と言うことでも良いんです。それが親鸞教学の特色です。本願文を引くときは必ず成就文を引用します。

法然教学はどうであるかという点で因願文を重視します。因願文への着眼です。法然上人はここだけ押さえれば良いと思ったのですが、親鸞聖人の場合は現実ということに重視したわけですね。法然上人の場合は「十念せん」ですから念、すなわち称える。親鸞聖人の場合は聞が重要です。因願文の方は meditating [pronouncing my Name]、ところが成就文の方は all beings hear his Name で、pronounce と hear になっているわけです。親鸞聖人において第 18 願は念仏、信心のオリジン（起源）でもあるわけですが、法然上人は称えるということに非常に重視するわけですね。親鸞聖人の場合は称えられたものを聞くということが大切な意味を持つてくることになります。だから前にもお話したかもしれませんが、この夏に浄土宗の知恩院で仏教大学の先生と対談しましたが、真宗では聞く、浄土宗では称えることが重要なわけですね。だから念仏は行です。

浄土宗の方との対話はいつも平行線になります。やはり違いますね、しかしお互いの違いを認め合って、これからも勉強していきましょうということになるわけですね。因願文を重視するか、成就文を重視するかで変わってくるわけですね。信心に先立って行がある、念仏が先にあるということは親鸞聖人自身もおっしゃっているわけですね。行信次第、念仏ぎょうしんしだい為本ねんぶつほんということですね。

続いて信心を得た人がどのような利益があるかについて、『大経』と『如来会』から引用しています。これも信心の教相と言っても良いかと思われそうです。信心の教相というのは教えの姿ということです。仏教の術語です。第 18 願を通して信心の教相は、本願の 18 願、因願文と成就文、そして信心の利益、そういったことで信心の教相、教えの言葉ということがはっきりとしてくるわけですね。「教相」は仏教独特の言葉で英語ではあまりない。稲垣

久雄¹⁷先生は the Doctrinal Aspect¹⁸と説明しておられます。稲垣先生は沢山の辞書を翻訳されておりますから私たちにとって非常に有難いです。この訳で分かりますように、きちんとした英語に対応する語がないのです。

説人の差別

信心の教相は仏説です。仏説であるということが重要です。教えは仏説です。これは聖人も非常に注意しているところです。化身土巻の中でそのことに少し触れています。『真宗聖典』の p.357 です。

「説人の差別を弁ぜば、おおよそ諸経の起説、五種に過ぎず。一つには仏説、二つには聖弟子説、三つには天仙説、四つには鬼神説、五つには変化説なり。」しかれば四種の所説は信用に足らず。この三経はすなわち大聖の自説なり¹⁹。

こう言われております。CWS でそれを見てください。P.241 です。

Relying on the teacher of the sutras and turning to the commentaries of the masters, I find that, with regard to the teaching of sutras, there are five kinds, distinguished in terms of their expositors: first, the Buddha's exposition; second, the exposition of holy disciples; third, the exposition of heavenly beings and hermitsages; fourth, the exposition of demigods ; and fifth, the exposition of miraculous spirits. Thus, [the later] four kinds of exposition are not to be relied upon. The three [Pure Land] sutras are the Great Sage's own exposition.²⁰

以上です。「説人の差別」は Distinctions of teachers です。1. Buddha 2. Holy Diciples 3. Heavenly beings 4. Demigods 5. Miraculous spirits です。「説人の差別」というところで親鸞聖人は大切なのは「仏説」だけであると言っております。我々が本当に帰依しなければならないのは仏説だけということです。しかし仏陀、釈迦と言っても沢山の経を説いている。その中で重要なのが浄土三部経（three pure land sutra）である。この三経だけが重要である。経は仏陀の教説が大切だと言うけれども、『法華経』を説いたお釈迦様、『華嚴経』を説いたお釈迦様、『般若経』を説いたお釈迦様も居るわけで、どのお釈迦様の説を聞くべきか。親鸞聖人は浄土三部経を説いたお釈迦様の説を聞くべきだと言っているわけです。ここに経の選びというものがあるわけです。「説人の差別」は重要な意味を持っているわけです。仏説に聞く。外道の説を聞かない。徹底的に依っていかねばならないのはお釈迦様

¹⁷ 稲垣 久雄(1929-) 龍谷大学名誉教授。

¹⁸ "A Dictionary of Japanese Buddhist Terms" by Hisao Inagaki and P. G. O'Neill. Nagata Bunshodo, Kyoto, 1984.

¹⁹ 『聖典』 p.357, l.8.

²⁰ CWS. p.241, l.5.

の説である。お釈迦様の説の中でも浄土の経を説いたお釈迦様の説が大切とされる。浄土三部経を所依の經典として、またその中でも^{しんじつきょう} 眞実教と^{ほうべんきょう} 方便教に分かれるわけです。眞実教は『大経』、方便教は『観経』と『小経』です。そこに一つの選びが出てくるわけです。

教相判釈

こういう選びが仏教の中で大切になってきたのは、^{きょうそうはんじやく} 教相判釈です。教判とも、判教とも言います。仏教の歴史の中で、何処で教相判釈が盛んになってくるかということ、中国です。教相判釈とは、つまりどの經典が大切なのかということです。仏教はキリスト教やイスラム教と違って經典が沢山あります。キリスト教で言えば旧約聖書と新約聖書があれば良いわけですし、イスラム教であればコーランがあれば良いわけです。しかし仏教はたくさん經典がある。だから經典を選ばなければならないという問題が起きてくるわけです。

教相判釈

インド	→	中国	→	日本	→	アメリカ
		自力・他力		二双四重		解釈学
		聖道・浄土		(堅超・横超)		(Hermenentics)
		雑行・正行		堅出・横出)		

インドから中国に入った時に先ず教相判釈があります。そして中国から日本に入ったときに教相判釈が行われます。浄土教の場合、中国では^{じりき} 自力・^{たりき} 他力、^{しょうどう} 聖道・^{じょうど} 浄土、^{ぞうぎょう} 雑行・^{しょうぎょう} 正行の判釈が行われた。日本に入ってくると、親鸞聖人^{にそうしじゅう} と言え、^{しゅちょう} 二双四重^{おうちょう} ^{しゅしゅつ} (堅超・横超・^{おうしゅつ} 堅出・横出) の教相判釈が行われます。今度アメリカに行くとうどうなるか。アメリカの人もたいへん教相判釈を大切にします。今は言わなくなりましたが、解釈学 (Hermenentics) という言葉が用いられます。アメリカの仏教学者は 1980 年代に盛んに解釈学と言いました。私がアメリカに行った時には Buddhist Hermenentics がすごく盛んでした。ロペス (Donald S. Lopez) さん、サンマン (Robert Thurman) さんが Buddhist Hermenentics という語を最初に用いた人です。ハワイ大のチャペル (David W. Chappell) さん、もう亡くなりましたが。ピーター・グレゴリー (Peter N. Gregory) さんも有名です。トーマス・カスーリス (Thomas P. Kasulis) 先生、それからロジャー・コーレス (Roger Corless) さんです。コーレスさんは

²¹ 「親鸞の説で、聖道門を堅、浄土門を横と立て、この二つにそれぞれ出と超を分けたことをいう。したがって堅に堅出・堅超、横に横出・横超を立てるが、この堅は自力、横は他力を意味し、出は順次段階を経てのぼって行く修行法、超は一足飛びにさとりに至ることをさす。(1) 堅超。自力聖道門の頓教のこと。たとえば天台宗。(2) 横超。他力浄土門の頓教のこと。浄土真宗で、阿弥陀仏を念ずることによって浄土に生まれることを説くものはこれに当る。(3) 堅出。自力聖道門の漸教のこと。たとえば法相宗や三論宗。(4) 横出。他力浄土門の漸教のこと」『広説仏教語大辞典』東京書籍、中村元監修、2001。

亡くなられました。こういう方々です。

中国に入った時に格義仏教 (koi buddhism) と言われました。中国思想で解釈していく。中国には epistemology (認識論) などはありません。だから何かが入って来たら中国の既成の概念で解釈します。これは一つの特徴ですね。中国は道教・儒教の国です。だから道教・儒教の考えで解釈していくわけです。認識論がないわけですから。アーヤ識のアーヤもないのでそのままもってくるわけです。それで教相判釈するわけです。アメリカは20年ほど前に Hermenentics が盛んでした。アメリカの人はすぐ別の流行に関心を示すのでもう忘れられています。

教相ということは非常に重要ですが、親鸞聖人の場合は信心についての教相は經典の言葉です。経は教相で、釈は教系です。教相は『大経』を中心にしていく。そこには『観経』、『小経』も入ってくるわけですが。教系は七祖です。

経 — 教相 — 『大経』、『観経』、『小経』

釈 — 教系 — 七祖

曾我量深²²先生に『七祖教系論²³』というのがあります。初期のものです。『七祖教系論』は真宗の教系を見ていく時に最初に位置してくるものではないかと思います。親鸞聖人は教相とともに教系を非常に大切にします。教系の中で今、挙げるのは『論註』『讚阿弥陀仏偈和讚』『観経義』(定善義)『往生要集』というのが信巻の真実信のところに出てきます。これは一つの系譜学です。信の系譜学 Genealogy です。系譜学はヨーロッパでも非常に大切にされて、例えばニーチェ²⁴、それからフーコー²⁵です。フーコーの場合は「主体の系譜学」を言います。親鸞聖人の場合はまさに「信の系譜学」です。信心が主体ですから。

そろそろ今日はこれで終わりにしますが、何か質問はありますか。

質疑応答

質問者：天台宗の観心^{かんじん}がありますが、浄土真宗では観心は言いません。観心を親鸞聖人はどのように解釈していますか。

安富：観心とどのように関係があるかと言うことですか。

質問者：はい、そうです。

安富：難しいことだと思います。

²² 曾我量深 (1875- 1971) 元大谷大学学長。

²³ 『曾我量深選集』第一巻、彌生書房、1970、p.3

²⁴ Friedrich Wilhelm Nietzsche (1844 - 1900) ドイツの哲学者。

²⁵ Michel Foucault (1926 - 1984) フランスの哲学者。

天台宗	教相	
	観心 ——	天台止観 (meditation)
真言宗	教相	
	事相 ——	儀礼 (ritual)
浄土真宗	教相 ——	覚如『教行信証大意』
	安心 ——	信心 (shinjin)『歎異抄』

天台宗の場合は教相に対して観心を言うわけです。真言宗の場合は教相に対して事相を言います。それで真宗の場合はどうかと言いますと、教相に対してはやはり安心^{あんじん}ということをやります。天台宗では教相はもちろん大切です。特に『法華経』の教相です。と同時に観心が非常に大切です。天台止観^{てんだいしかん}です。天台三大部というのがあります。『法華玄義』『法華文句』『摩訶止観』^{まか}です。観心について書いています。真言宗の事相はこれは儀礼 (ritual) です。真宗の場合は信心です。我々がテキストとして勉強していく場合は教相は『教行信証』をテキストにしていきますが、安心は『歎異抄』を中心に学んでいきます。というのは清沢満之先生が「安心第一の書」と言ったからです。「教相第一の書」は『教行信証』です。覚如上人は『教行信証大意』^{きょうぎょうしんしょうたいい}の中で、真宗の教相は『教行信証』であると言っています。一つの宗が成り立っていく場合には教相と、同時に実践的な側面が非常に重要になってくるわけです。その二つが二つの翼です。

略号表

CWS: *The Collected Works of Shinran, Volume I: The Writings.* Jodo Shinshu Hongwanji-ha, 1997.

DTS: *The Kyogyoshinsho: The Collection of Passages Expounding the True Teaching, Living, Faith, and Realizing of the Pure Land.* Shinshu Otaniha, 1973.

『教行信証』: 「顕浄土真実教行証文類」『真宗聖典』真宗聖典編纂委員会, 東本願寺出版部, 1978, p.149.

『聖典』: 『真宗聖典』真宗聖典編纂委員会, 東本願寺出版部, 1978.

『大経』: 「仏説無量寿経」『真宗聖典』真宗聖典編纂委員会, 東本願寺出版部, 1978, p.1

『観経』: 「仏説観無量寿経」『真宗聖典』真宗聖典編纂委員会, 東本願寺出版部, 1978, p.89

『小経』: 「仏説阿弥陀経」『真宗聖典』真宗聖典編纂委員会, 東本願寺出版部, 1978, p.125

『論註』: 『浄土論註』(『無量寿経優婆提舍願生偈註』) 大正新脩大藏経, vol.40 p.826.